
ヒーロー見参

浅倉 × 神木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーロー見参

【Nコード】

N5391C

【作者名】

浅倉×神木

【あらすじ】

ヒーローが現れた。ヒーローって矛盾してない？

ヒーロー見参

学校から帰る、私は普段と同じ道を通る。私は普段と同じ夕暮れを眺めながら、普段と同じ、香ばしい香りを漂わせる小さいパン屋の前を通り過ぎようとする。しかし今日は、私の鼻と夕飯前の胃袋を悪戯に刺激する香りを楽しむため、少し店の前に立ち止まった。

白い外壁にカラフルな色彩で「clips」とかかれた看板がかけられている。ガラス越しに見える店内は、人と笑顔が混み合っていた。中々にこのパン屋パン屋人気なのだと思います、そういえば昨日も同じことを思ってたなと思った。

そうやってただボンヤリしていると、後ろから声をかけられた。振り返ると、声の主であると思われる少し太めの中年男性が、視線を泳がせて立っていた。私は

「何ですか？」と何の躊躇いもなく応対した。話を聞けば、こここの近辺にある東野中央公園の場所を知りたいとのことだった。偶然にもその公園は、私の帰宅路に含まれていて、私は男性をその公園まで案内することにしたのだ。

ただそれだけだった。

+++++

助けて。

私は誰にも届くはずのない思いを、胸の中で叫び続けた。

埃まみれの街灯が、弱々しく私とオトコを照らしていて、それは人目の届かない草むらに押し倒された私には、とても背の高い物に見えた。まるで夜空に浮かぶ丸い月にまで届きそうな高さ。

ふとそんな光景を遮る影が、私の顔に重なる。

脂ぎった皮膚に斑にできた吹き出物。まるでさつき見た満月のよ

うに丸い顔。でも月のように美しいわけではない。ギラギラと光る両目は、獲物を前にした獣のようだ。影はそんな気持ちの悪い変態だった。

その変態の顔が、私の顔へと徐々に近付いてくる。

イヤだ。

興奮しているのか、荒い息づかいをしていて、その生暖かい息が私の首筋にかかる。

きつとこいつは私を襲うつもりなんだろう。こいつの太い腕が私の両手の自由を奪っており、さらに巨体が私の体に馬乗りしているため、逃げようがなかった。

こいつの顔はもう鼻先まで来ていて、口元はいやらしい笑みで歪んでいた。私は覚悟を決めた。汚される。私はこいつに汚される。

これからされることを想像し、私は恐怖と嫌悪感で体が硬直する。

「助けて」

それは声になっただろうか。それは誰かに届いただろうか。私は最後の抵抗として呟いて、目をつぶった。

瞬間、体が軽くなる。

「ヒーロー見参……」

【ヒーロー見参】

「大丈夫？ 怪我してないかな」

見たところ、青年といった年頃だろうか。凜とした顔つきに、すらりと伸びた背。サラサラしてそうな長めの黒髪で、若々しさを感じさせるその姿は黒いスーツを着ているにも関わらず、満月の光によって強く浮き上がっていた。

彼は私の数歩先前に立っており、倒れた状態の私にしてみれば街灯のように背がかなり高く見えた。

私はゆっくりと、そして力無く上半身を起こした。そして右足を地面に立てようとして曲げる。しかし曲がらない。まだ体が思うように動かせなかった。きつと先ほどの恐怖が残ってるんだろ。手足が小刻みに痙攣していて、背筋に悪寒が何度も走っている。そんな私は小さい声をなんとか絞り出して彼に尋ねた。

「誰……」

「ヒーロー」

「……ヒーロー？」

「HERO!!」

間抜けにオウム返す私に、彼は口調を強くし堂々と名乗った。いや、名乗ったと言えるのだろうか。ヒーローって……いい年の青年だろうに。

そんな疑心暗鬼の私を見てかヒーローは、

「むう」と小さく唸ると、私の左奥に設置されている鉄製の白くて四角い公共ゴミ箱にもたれかかる変態、もとい私を襲おうとした男を指差した。男は白い無地のTシャツを土で汚し、混濁した白目を剥いてグツタリと俯いている。

「僕はヒーローだったから君を助けた、だからヒーローと名乗ったのさ」

まるでそれが当然であり、絶対に間違っていないという確信と信念を持つてるかのように、軽く鼻で笑うヒーロー。

「警察にはもう連絡してある。あ、あの男性は気絶してるだけさ、誤解しないようにね」

彼の人間性というかタイプというか、要するに彼みたいな人には私は十五年間生きて一度も出会ったことがなかった。だから私は、彼との出会いに対する衝撃によって思考が一時停止して、ただ呆然と口を半開くしかなかった。

「それじゃ、僕はこれで退散するよ」

ズボンのポケットに両手をつ込みながら彼はひらりと身を翻して、私に背を向けた。中々に遅しそうな大きい背中が、私の眼にしっかりと焼きついた。

「待って!!」

思いもしない大声が、口から飛び出てしまった。気づいたときには遅かった。人気のない公園に、私の素っ頓狂な声が響き渡って、木や遊具などの物にぶつかり反射して私の耳へと帰ってきた。何やつてるんだ私。余りの恥ずかしさのためか、私は自分の頬が熱くなるのを感じた。

「あの……」

急に小さくなった声。これはこれで恥ずかしい……しかしそのままですらでも、私は聞きたいことがある、いや聞かなければいけないことがある。

ゴチャゴチャと考えている私を、彼は振り返って穏やかな眼で見つめてくる。不思議だ。なぜか胸の中が楽になる。

「名前を教えてください！」 少し大きめの声になってしまった。でも彼と私の距離は結構離れているので、丁度良い音量かもしれない。少なくともそう思うと気が楽だ。

「名乗らずに去るのがヒーローだろう？」

軽い笑みの表情を浮かべながら彼は答えた。そしてまた身を返して遅い背中を見せつつ、街灯の届かない闇の中へと歩いていった。遠くから、パトカーのサイレンが鳴いているのが聞こえる。私はその音をなぜかクラシック音楽を聴くようにゆったりと身を任せて聴き、先ほどの彼の言葉を思い起こした。

『名乗らずに去るのがヒーローだろう？』しかしヒーローと名乗った彼の言葉は矛盾しており、そのことに気づいた私は含み笑いを浮かべた。

ふと夜空を見上げる。青黒いキャンバスに、輝く点と巨大な円が描かれている。綺麗だ。

所詮ヒーローなんて矛盾だらけなんだ。と私は親しい友人をから

かうような、なんとも愉快な気分になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5391c/>

ヒーロー見参

2011年1月26日16時42分発行